

午前2時半。エクルズ通り7番。モリーはベッドの中で様々なことに想いを巡らせる。本挿話は8つのパラグラフ（ジョイスの手紙では「センテンス」(Letters I 170)）から構成される。以下、それぞれの内容を要約する。

①U-Δ 18.279-95 / U 18.1-245

モリーの「意識の流れ」は、「Yes だって先にはぜったいしなかったことよ朝の食じを卵を2つつけてベッドの中で食べたいと言うなんて」(U-Δ 18.279)という驚きとも嘆きともつかない〈曖昧な〉独白から始まる。ミス・リオダーン

（『肖像』のダンテ）への恨み節は、「彼がああいうばあさんやウェイターやそれからこじきなんかにもていねいなところが好きあの人はむちゃくちゃにいばるなんてことない人だもの」(U-Δ 18.280)というブルームの〈やさしさ〉へと変わるが、その直後「でもいつもそうとはかぎらない」、具合が悪いときは「あつかいがむずかし」かったと回想する。ブルームがこの日「夜の女」と関係を持ったのではと疑うモリーは<sup>2</sup>、「ちっとも気にかけない」と強がりつつも、かつて雇っていた女中メアリとブルームとの関係を怒りと共に思い出し、夫に対し「あれはやめさせなくちゃ」と思い、ボイランとの情事も「これ1ぺんきりでおしまいね」と思う。ボイランとの情事を振り返り、彼が性的に満足したか否かを気にしつつも、彼女自身は「3かいか4かい行った」と回想するが、帰り際に彼が自分の「おしりをびしゃりとたたいたこと」は嫌だったと振り返る。やがて彼女の想念は、結婚前にブルームを巡ってジョージ・ポーエル（デニス・ブリーンの妻）と三角関係にあった時代へ遡り、ブルームへの不満をこぼしつつも、「ほかの男と結婚するくらいなら20かいも死ぬほうがまし」と考え、ブルームも自分が「つくす女」だと「心のそこでは」「よくわかっている」はず、と思う(U-Δ 18.294-95)。



2022年6月16日 エクルズ通り76番と77番の前で、朝8時から始まる路上朗読会の様子（撮影：小林）

<sup>1</sup> この一文に関してまず注意すべきは、第17挿話の教理問答体による文体によって隠されてしまっているが、ブルームはモリーに対し、1904年6月16日の一日に起こったことを語りつつ（一部は改竄、もしくは隠蔽しつつ）、明日の朝食に関する希望を伝えていたということである（このことは、のちにモリーがスティーヴンズについて考えるときにも、ブルームが彼について既に第17挿話で彼女に語っていた、という前提を踏まえて読む必要がある）。

また、本挿話は8つのパラグラフ（「センテンス」）から成ることから「無限」を表す記号、∞との関連が指摘されているが（他にモリー（と聖母マリア）の誕生日である9月8日、ブルーム夫妻の結婚記念日10月8日、モリーのお尻の形の形象、夫婦が頭と足をそれぞれ反対に寝ている69の姿）、ここでブルームが注文する2つの卵もまた、第17挿話最後のピリオド＝卵説と関連しつつ、∞を形成している。

<sup>2</sup> モリーがこのように疑うのは、一昨日ブルームが仕事のことを考える振りをして（マーサ宛の）手紙を書いていたことを彼女が盗み見て知っているためである(U-Δ 18.282)。これは、第4挿話でモリーがボイランの手紙を枕の下に隠したことをブルームが「背中の目(his backward eye)」(U.4.256)で見ていることを想起させる。この作品において手紙は、その書き手は隠そうとするが、実際に隠したい相手にはその行為を盗み見られているという構造を持つ。

また、「文字愛好者」としてのモリー、あるいは第18挿話のエクリチュール性については川口喬一が非常に端的かつ鮮やかに論じている（『「ユリシーズ」演義』研究社出版、1994年、481-85頁）。

<sup>3</sup> この「あれ」については、David Pierce(*Reading Joyce*, Routledge, 2008)は以下の3通りの解釈を提示している——①女中を誘惑すること②ブルームの卑猥な言葉③その他の特異な性的な振る舞い(282)。

②U-Δ 18.295-315 / U 18.246-534

ボイランと初めて会ったときのことの記憶から始まり、歌手のバーテル・ダーシーとの聖歌隊席の階段でのキスを思い出し、そのことをブルームに「うちあけてびっくりさせよう」、「ともかく彼は自ぶんが知らないことはないと思ひこんでいる」のだから、と考える(U-Δ 18.298)。ズロースや手袋へのブルームのフェティシズムに対しては呆れているモリーだが、毎朝手紙を寄越してくれた「彼の言いより方が好きだった」(U-Δ 18.301)と思う。来週のベルファストへの演奏旅行のこと、ボイランとの駆け落ちの可能性を考えたあと、ダブリンで愛人関係にあったガードナー中尉の戦死の報を受けたときの記憶から、戦争の不条理さに想いを馳せる。夕刊を買ったボイランが競馬で負けたことに猛烈に腹を立てていたことも思い出すが、モリーにその真相——穴馬の throwaway が勝ったこと——はわからない。スタウトを飲むのをやめて痩せなくてはという想いと、肌荒れや歳を重ねてゆくことへの不安なども語られ、それを転嫁するかのよう、ブルームの稼ぎが少ないこと、彼がジョゼフ・カフ商会で問題を起こして解雇されたことへの不満へと続いてゆく。

③U-Δ 18.315-19 / U 18.535-95

固くなった片方の乳首から乳房、そしてその二つの丸からの連想で、モリーは美術館の「男の彫こく」の「大きなふくろ」を想い<sup>4</sup>、かつてそれを絵に描いてみたときのことを思い出す。また、ブルームがヒーリー文房具店で「しくじって」失業をした際には、彼から提案されて、ヌードモデルとして働くことも考えたという。想像の中で己の髪を後ろに垂らしてみると、その連想からモリーはベッドの上にかかっていた「ニンフの湯浴み」のポスターに思い至り、この日の朝ブルームに尋ねた言葉を「会ったとがった管つきの何か(met something with hoses)」(U-Δ 18.317/U 18.565)と思い出す(ついでに、夫に対し「簡たんに説めいすることがぜったいできない人なのね」、とも)。もう片方の乳首はそれほどでもない、と思いながら、ミリーを授乳していた頃の記憶、その際ブルームに「お乳を吸ってもらわなくちゃならなかった」ことを思い出す。

④U-Δ 18.319-329 / U 18.596-747

遠くの汽笛の音を聞きながら、今日が暑い日だったと思いだし、その気候からジブラルタルでの娘時代へとモリーの連想は続く。父の友人であるミスタ・スタナップの妻、ヘスターとの楽しい思い出(「あらしの夜あたしは彼女のベッドで眠って彼女はうでであたしをだきしめて」(U-Δ 18.322))は、彼らが去った後のジブラルタルでの孤独な過去の記憶へと反転し、それは現在の「おきゃくもなければ手がみも来ない」(U-Δ 18.327)孤独な生活へ接続される。そして手紙からの連想はボイランの手紙(例の“Bold hand”(U 4.244)の!)が「たいしたものじゃな」くてがっかりしたこと、それに返事を書こうと思いつつも「誰かあたしに恋ぶみを書いてくれないかしら」(U-Δ 18.328)という彼女の孤独が強調されている。

⑤U-Δ 18.329-340 / U 18.748-908

そしてモリーは、初めて恋文をくれた初恋相手、マルヴィを思い出す(「あたしはペチコートとボディスのあいだにかくしていちにちじゅうすみからすみまで読んで」(U-Δ 18.330))。ジブラルタルに駐留していたイギリス海軍の大尉である彼は、15歳の彼女のファースト・キスの相手であったが、すぐさま彼の出発のときが

<sup>4</sup> この個所は第8挿話と第9挿話の幕間でブルームが美術館の女神の肛門の有無を確認したと重なる(U 8.931-32)。

やって来てしまう。最後のデートで彼女は胸が広く開いた白いブラウスを着て彼を興奮させようとするが、「ペチコートの中」は「さわらせまいとし」て、自分のハンカチの中に射精をさせたことを思い出す(U-Δ18.333)。自転車に乗るような近頃の若い娘が穿くブルーマー服とブルームという名前の連想から、母のルニタ・ラレドは「なんてきれいな名まえを持っていた」ことを思い出す<sup>5</sup>。マルヴィからもらったクラダー指輪をモリーは、ボーア戦争へ出征するガードナーに贈ったことも語られる。そして、再び鳴る列車の汽笛に合わせて、演奏旅行で歌う予定の「愛のなつかしいやさしい歌」をそっと歌い、さらに、ブルームを起こさないように「よわくそっと(piano quietly)」(U18.907)「おならをする」。

#### ⑥U-Δ18.340-56 / U18.909-1148

ひとまず安堵するモリーは、「こん夜は眠れそうもないわ」と思い、明日（「もうきょうと言わなくちゃ」(U-Δ18.341-42)）何を食べようかと想いを巡らせる。やがてモリーは娘ミリーのことを考える——ブルームがミリーをマリンガーの写真屋へ行かせたのはボイランと自分の関係が理由であること、ミリーの生意気な態度や口答えに不満をこぼしつつ、同時に自分も同じ年頃のことはそうだったこと、ブルームの躰がなくなっている必要以上に自分が厳しくしなければならないこと、など。そしてモリーはブルームがかつて迷い犬を連れ帰ってきたことを思い出した直後に、スティーヴンについて考えるが（「サイモンディーダラスのむす子」(U-Δ18.352)）、すぐさま生理が始まる（「とにかくかれはあたしを妊しんさせなかったわけね」(U-Δ18.354)）。モリーは室内便器にまたがり、放尿をする。

#### ⑦U-Δ18.356-71 / U18.1149-367

体の不調を感じるモリーは便器の上に座ったまま、婦人科のコリンズ医師とのやり取りやブルームと初めて会ったときのことを考える<sup>6</sup>。ナプキンで処理してからベッドに「そうっとよわく(easy piano)」戻り、ブルームには購入相手について嘘の情報を教えたが、このベッドは「コーエンじいさん」を思い出させる<sup>7</sup>、と思う。ブルームが再び職を失うのではという恐れや、彼がこっそりコンドームを財布の中に隠し持っていることへの不満（「あたしが知らないとは彼は思っているんだわ男って嘘つきね」(U-Δ18.362)）、ダブリンの男たちがまるで互いを殺し合うように酒を飲みすぎること、そしてそのような散財はしない「ふんべつのある」ブルームを彼らが陰で悪く言っていることに憤る。一緒にステージに上がったことのあるサイモンの美声を思い出した彼女は、息子スティーヴンのこと、ブルームが彼女自身の写真を彼に見せた、と寝る前に言っていたことを思い出し、11年前に馬車に乗ったスティーヴンの記憶から11年前に早世したルーディを思い出す。スティーヴンが自分を詩に書いてくれないかしらと夢想し、彼の愛人になったら、ボイランの方は、とも想像する。

#### ⑧U-Δ18.371-388 / U18.1368-609

スティーヴンのことを考えたせいか、モリーは余計にボイランの無神経さや無教養が気に食わないと感じ

<sup>5</sup> モリーの母、およびの彼女のユダヤ性については下記の論文を参照されたい。新名桂子「モリーはユダヤ人か：『ユリシーズ』におけるユダヤ人表象を読む」『宮崎大学教育文化学部紀要 創立130周年記念特別号』、2015年、53-62頁。

<sup>6</sup> 「リアアボース台町にすんでたじぶんあたしたちは10分かんほどみつめあったまま立ちすくんでいてまるでどこかであったことあるみたいたぶんあたしがお母さんになてユダヤ女のような顔だちのせい」(359)

<sup>7</sup> 結城英雄はこのコーエンという名字から、モリーの母親は第15挿話の娼館の主、「ベラ・コーエンがモリーの母親であるという可能性を示唆しているのかもしれない」と指摘している（『『ユリシーズ』の謎を歩く』集英社、1999年、419-20頁）。

る。その一方、彼女は彼が興奮をしたのも無理はない、「きっと男が女の体で味わうたのしみは大へんなものだろう」から、自分が「男になってちょっと男のあのしなものでためしてみたいな」(U-Δ 18.372)と考える。その一方、男が殺し合いばかりしていることに怒り、女でいることや母でいることに男たちが無理解であることをモリーは嘆く。「めんどろを見てくれる母おやがいな」かった彼女自身の孤独な想いは、母を失ったステイーヴンへと繋がり、自分の家に息子がいないこと、ルーディが亡くなった時に「羊のジャケット」を着せて葬ったことへの後悔、そして「あれいらいあたしたちはすっかりちがってしまって」と考える。しかし、即座に「O 考えつづけてゆううつになるのはよしましよあのことはもう」(U-Δ 18.376-77)と気持ちを切り替えたモリーは、ステイーヴンが泊っていつてくれたらよかったのにと考え、下宿人として迎え入れ、彼からイタリア語を教わり、自分はスペイン語を教えればいい、と思う。そして、モリーはブルーム「にもういちどチャンスをあたえてあげよう」と考え、翌朝はブルームのために早起きをして、着飾ったり、上等な下着を身に付けたりして彼を誘惑しようとする。「神さまはあたしたち [女] を男にとってこんなに魅りよく的におつくりになるはずない」と考えるモリーにとって、不義は不義ではない。彼女は(自分と同様に)無神論者たちは「宇宙で最しよの方」を知らないし、なぜ「あたしたちがこうして生きている」のかも、なぜ「あすの朝お日さまがのぼるのか」も知らないと思う。そして最後の「お日さま(the sun)」という言葉に導かれるようにして、モリーはブルームが彼女に求婚を迫ったハウスの丘での出来事を思い出す——「太陽はあなたのためにかがやっていると彼は言った(the sun shines for you he said)」(U-Δ 18.384/ U 18.1571-72)。それに対しモリーは思う——「yes だからあたし彼が好きだってわたしにはわかった女とはどういうものなのか彼にはわかっていることが感じ取っていることがそしてあたしにはわかったいつだって彼をあやつれるということだからあたしはできるかぎりのあらゆるよろこびを彼に味あわせて彼を誘惑してとうとう彼はあたしに yes と言ってくれと」(U-Δ 18.385-86)。この後彼女は、即座に彼の要求に応えずに「とてもいろいろのこと彼の知らないこと」を考える。ここでこれまでモリーの意識を追ってきた読者は、自らがブルームも知らない彼女の記憶の一部を特権的に知り得ていることに思い至る。「yes そして彼がムーア人の城へきの下であたしにキスしたし方そしてあたしはもうひとりと同じほど彼のことも好きだと思った」とモリーが思うとき、なるほど確かにムーア人の城壁でのキスはブルームが事実としては知っていても(Molly, lieutenant Mulvey that kissed her under the Moorish wall beside the gardens. Fifteen she told me.(U 13.889-90))、その初恋を巡る彼女の想いの細部までを知っているのは、私たち読者の方なのだ気づくだろう。「そしてあたしは目でうながしたもういちどおっしやって yes すると彼はあたしにねえどうなのと聞いた yes 山にさくぼくの花 yes と言っておくれとそしてあたしはず彼を、だきしめ yes そして彼を引きよせ彼があたしの乳ぶさにすっかりふれることができるように匂やかに yes そして彼の心ぞうはたか鳴っていてそして yes とあたしは言った yes いいことよ Yes」(U-Δ 18.387-88)——ジョイスは最後に大きな「ドラマティック・アイロニー」をもうひとつ用意している。すなわち、登場人物のモリーには決して知りえないが、読者である私たちだけが知っていること、つまり、ブルームもまた第8挿話でこのハウスの丘の〈楽園〉を想起していた(U 8.899-916)、という事実だ。私たちは〈楽園〉に戻ることはできない。それはすでに失われている。しかし、その幸福な記憶を共有すること、共に喜び/祝うことはできる(rejoice/reJoyce)——楽園から遠く離れた100年後の異国の地でも、古代ギリシャの英雄の10年間の放浪に匹敵するような3年をかけた読書会という長い航海(後悔?)を経た今、何度でもこの〈楽園〉は繰り返される。Many Happy Returns!——これからも多くの楽しい反復を、皆様と一緒に共有できますように!

※最後は「あらずじ」ではないですね、これ!(^^)!